

Title	古代の氏族文學
Sub Title	Clan element in the ancient Japanese literature
Author	折口, 信夫(Origuchi, Shinobu)
Publisher	三田史学会
Publication year	1948
Jtitle	史学 Vol.23, No.3 (1948. 11) ,p.36(296)- 52(312)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	特輯古代日本研究
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19481100-0036">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19481100-0036</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 古代の氏族文學

折口 信夫

## 前 書

日本の古代文學と言ふと、大體、觀察點がきまつてゐた。即、宮廷を中心とした傳誦の物語、と言ふ風に解釋せられて來てゐる。それで、いきほひ、宮廷を取り圍んでゐた澤山の氏族の物語が、其中に編入せられてゐる、と言ふだけの豫期は出来るが、其以上には擴つて行つてゐない。

かう言ふ事を言ふのは、日本の國の古代には、大きな氏族以外に、澤山の部曲——職業團體——を基礎とした部落、或場合には移動する部落が發達してゐた。そして、その子孫——或場合には必しも血族的な子孫でなく、職業の遙かな後繼者と言ふ意味をも含めて——が、擴つてゐた。そして、其等の者が持つてゐた、特殊な文學が長く残つた。つまり、氏族文學が固定して後、部曲の文學が長く残つて、室町から江戸へかけての、所謂庶民文學の發達の苗圃となつてゐる。それを考へないと、室町頃から、突如として、雑多な小さい文學が興つて來る理由が解けない。

果して此話が、其解説に役立つかどうか、氏族文學の解説きりに終るかもしれないが、其方面へも、注意を向けて

貫はねばならない。古代の文學は、我々が受け取る形は傳説に過ぎない。けれども古代の人には、價值ある歴史だと思はれてゐた。その様な價值のあるものと、何故考へられたのか。其理由をも、私の話が、自ら解釋して行く事になれば、幸福だと思ふ。

### 部曲の成立

昔の人達は、自分等の生存してゐた記念を留めると言ふ事に對して、我々が考へぬ姿で熱心であつた。併、我々が採る様な方法を探つてゐなかつたので、不幸な目に陥つてゐた。即、我々の言語と言ふものは、いつまでも變らずに傳へられて行くものではなく、適當に意味が理會せられ、形が變化し、そして最後には、大きな忘却が來ると言ふことを考へなかつた。神聖な言語で傳へる事が、一番大切な事であり、又適切な事であると思つてゐた。それが、一番古い歴史と信じてゐるものを傳へるには、具合の悪い形であつた。傳誦の機關が悪かつたと言ふ事になるが、昔の人としては、其方法を選ぶより外に、爲方がなかつたのだ。

かう言ふ方法を探つて行けば、後世に、生存の記念として残るものと信じてゐた。妄信のいたましさは、永久に残る筈のものが消えて行く。此事實から考へると、表面幸福である様に見える、歴代天子も、一方に不幸な一面を持つて居られたと言ふ事になる。

立派な御子がおありになつて、子孫が續いて行くものと自信を持つ事の出来る方々でも、まるで、子孫の絶えるだらうと言ふ不安を持つて居られた天子と同じ様に、御自分の生存の記念を残さうとせられた。

かう言ふ風に話を進めて來たのは、御子代部・御名代部の話をするつもりなのである。

此は、天子並びに、非常に宮廷に近い親等の皇族に限つて行はれた事なのだ。つまり、自分の身の後に、自分の名が傳はらぬ。どうかしてそれを傳へたいと言ふ考へから、かう言ふ團體の民を新しく組織して、一つの移動部落に、

御自分の御名や、生涯の中の記念すべき出来事を、傳へさせておかれた。

處が、前に述べた様に、かう言ふ必要のない即、子孫もれつきとしてあり、後世にも御自分の御一身の系統の絶える事の考へられぬ方々までが、別の方法で、生存を傳へようとなさつてゐる。それが、同時に言はうとする、日置部ヒオキベ、私部シイテと言ふ風なものゝ出来た理由である。

つまり、古代の天子、皇后、又は有力な皇子にとつては、自分の名が消えてしまふと言ふ事が、永遠の煩悶とも言ふべきものであつたのだ。

私の考へでは、おそらく、まづ日置部があり、それから私部が派生して來、その一方にやゝ遅れて、名代部・子代部が出来て來たのだらうと思つてゐる。そして、此説明が出来れば、部曲の文學と氏族の文學との交渉に就いて、説明がつくのだと思ふ。

### 日置部・大舍人部

日置部は、詳しくは、日置大舍人部と言つたもの、と見るのが適當だ。これを略して、日置部と言ひ、又大舍人部とも言ふ。

大舍人とは、宮廷に直屬する舍人の事を言つたので、諸國から召された舍人の中、大部分が宮廷に仕へて大舍人と言ひ、其剩餘の者が、皇親・大貴族に與へられて、其方を單に、舍人と言つた。文字では資人・帳内などゝ書き分けられた。宮廷の舍人が、大舍人・小舍人及び舍人と分れて、複雑になるが、もとは簡單で、大は、宮廷直屬であることを、示してゐるのだ。

此大舍人を以て組織した團體であるから、大舍人部と言ひ、日置きの方法に其職掌があつたから、日置部と呼ばれた。日置は又日祀ヒツツリ、日奉ヒツツツとも言はれる。語は違ふが、どちらも天體の運行を觀察して、それによつて曆を定める事から

出た語である。そのもとは、太陽神の信仰にあつて、日を拜む所から、其方面を特に名としたのが、日まつりだ。

一體、昔の宮廷の信仰では、歴代の天子常に亦一人の天子である、と言ふ考へが、根本にある。同時に、歴代の天子は、いつも御自分を一人ぼつちの者と考へてゐられる。と言ふのは、歴代の天子を、個性のないひと續きのもつと見、どの方も同じ資格として思つてゐるので、それを、一人々々の天子の側から言へば、信仰の上では、自分の續きが考へられない。永久に同じ一人の天子であると考へる事は、其事自身別の立場から見れば、其天子が初めから仕舞ひまでの天子だと言ふ事になる。

つまり宮廷の信仰に於いては、自分の一代で、完全の天子である爲に、次の天子との連絡が、頗る淡くなつて了ふ。事實は、次の天子が前代と同じ信仰を保つのだが、さう言ふ見方からすれば、代々の天子が持たれた信仰、行つてゐられた信仰は、其天子一代切りと言ふ事になる。それである天子一代がすむと、すつかりそれと關係のない宮廷生活が、改めて其處におこる訣で、その爲、前代の天子は、豫め、御自分の宮廷生活を、宮廷の外に持つて行つて、永續させようとなされた。

其は誰がするかと言ふと、天子のないあとは、中心の人がゐないので、天子に近い者は大舍人だけである。大舍人は、身分は低いが、寢殿近くまで侍つてゐる位で、其關係はごく親しい。此大舍人達が、宮廷の外に部落を作り、或は一所に定住し、或は部落を移動させつゝ生活し、其村繁榮に適した土地を求めて行つた。勿論それだけでは意味がないので、仕へてゐた宮廷に行はれてゐた信仰を持ち搬んだ。それを、定住した土地の周圍、或は過ぎて行く土地の周圍に布教しつゝ、残して行く事を考へてゐた。それが、其天子の生存の記念を留めておく適切な方法であると考へた。

其外に、是非とも附帯した事は、一代の重要な出來事、更に何と言ふ御名の天子であるかと言ふ事を、宮廷の口立て系圖の上に、位置をきちんと定めなければならなかつた。

宮廷の系圖は、日繼ぎである。繼ぎとは、口の上の系圖と言ふ事で、ひつぎとは、神秘的な系圖と言ふ事だ。

此日繼ぎのどの邊に順序立て、位置を占めてお出での方だと言ふ事を、言はなければならなかつた。そして、それから此村が初まつた、此職が初まつた、と言ふ様な傳誦になる訣である。

右に述べた事と、矛盾した様な事が考へられるのは、大舍人たちが組織した處の、さう言ふ部落には、其部落の初め主である天子の子孫の、どの人かと關係してゐられるに違ひないと言ふことである。そこに經濟關係がある。

此を、日祀ヒツツリと言ふのは、日本でも、太陽神の信仰があつたからだ、簡単に説くのはいけない。日本の天子は、外の國の咒王と同じく、天體の移り代りによつて、農村の行事の指導をする。非常な威力をもつてゐられると思つてゐた。そして、其力によつて世の中を治められるものと思つてゐた。つまり治世の威力は、天體を觀察する事によつて生ずるものと考へてゐた。其觀察する事が出来るのは、天體によく仕へ、よく祭つてゐるからだ、と考へられてゐる。但し、ひと言ふからと言つて、太陽崇拜と言ふ事に、力點をおいては、あやまり易い。

日置のおくとは、勘定すると言ふ事で、勘定をする物質があつて、其を纏めたり排列したりする事によつて、數を數へた。つまり、日を勘定する事によつて、天體の運行豫告、天象の變化を示した、ごく簡単な曆である。

つまり、日置と言ふ語の方は、日祀と言ふ語に比べて、其効果を重く見て、之を技術的に考へて、其天子の指導する方法をば、曆として受取つた訣だ。それを、其時分の語で、右に言つた様な意味から、日置と言つたのだ。

此意味の日置と言ふ語は、平安朝の源爲憲の『口遊クイユ』と言ふ書物に出てゐる。時代は變つてゐるが、おそろく古い語を傳へてゐるのである。

つまり日置、大舍人部とは、歴代の宮廷に於ける信仰を、外へ持ち出して、世間へ唱導して居た部落の名となつたと言ふ事が出来る。

宮廷に於いては、代々の御子がある方も多く、御自分の存在の傳はらないと言ふ様な不安は、ない筈なのである

が、日本の信仰をつき詰めて行くと、天子は永遠に一人であつて、御自分一人で永遠が盡きると言ふ考へになるから、宮廷以外に死後の生命を擴張して行く事になり、さうした部曲によつて、名を留めようと考へられる様になつたのである。

それでは、其天子の御一代で、何が歴史として重大であるか、と言ふ事だ。

此も、眞實あつた事、注意すべき事を傳へたのだと思はれるが、何が御一代中、最重大な事かと言ふ判断は、昔は出来なかつたであらう。後になれば、歴史を読みもし、聞きもしてゐるので、此が此時代だけの特別の出来事であると判断出来る様になるが、昔の人には、傳へるべき事とさうでない事とが、きまらなかつたであらう。

結局、後へ傳へる事は、其天子が経験して來られた宮廷の儀禮と言ふ事だ。それは何より大事な事であつた。それは、それによつて天子が保證せられてゐるからだ。たとへば、大嘗祭は、一代々々にあるのだが、一代だけ切り離して考へると、大事な行事である。我々から言へば、どの御代にもある事だ、と言へるのだが、歴史的認識の乏しい時代、歴史的に考へる事の出来ない時代には、我々が今考へる様な訣にはいかない。

今日我々が記紀その外に記録せられた断片の記述を見て驚く事は、どの天子でも、大凡同じ様な事を経験せられてゐる、と言ふ事だ。言ひかへると、天子一代の重大な事柄と言ふのは、類型的で、歴史的根拠が浅い。併此は、古代人と我々とは、歴史に對する考へが違ふのであるから、是非もない事だ。

従つて、全く違つた事を傳へてゐる様に思はれ乍ら、おそらくは同じ事を、違つた部落の人が傳へてゐた事になるのだ。そして、人間は、絶えず變化し、他と區畫して來るので、傳へられて行くものは、結局は同じ状態にある事は出来ない。次第に大同小異の變化をおこして來て、やがて岐れてしまふ。かうして發達しるのが、記紀其外の断片的記述である。

結果から言へば、古代日本の宮廷は、永遠に一人の天子の御代が経過してゐるのと同じ形をとつてゐたのであるが、

天子一代々々の部曲の民自身は、非常に差別のある特殊な歴史を保存して來てゐるのだ、と信じて來たと言ふ事になる。

かうして此が、日記部・日置部・大舍人部と、色々の形で傳へられたのであるが、其傳誦は、必、其天子の一生涯を記念する、と思はせる特殊な名稱がついてゐなくてはならぬ。或は其天子の居られた宮廷の名、天子の御名、或は異名、と言つた具合に、色々の形があるが、一方にはたゞ漠然としてしまつて、單に大舍人部、或は日置部など、言つてゐる。それで、區別しないのと同じ事になつてしまつて行く。結局、昔の人は、永遠と言ふ事を簡單に考へてゐたので、歴史を傳へて歴史を傳へざるに似る悲惨な事になつたのである。

かう言ふ團體によつて傳へられてゐた敘事詩は、大同小異であつたらうが、色々な種類に分れてゐたものと考へていく様だ。

處が、まう一つ訣らぬ事は、大舍人と對立して、女の舍人がある。采女だ。

采女は、諸國の豪族の女で、此が召されて、天子のお側近く仕へてゐる。此亦、歴代の天子の專屬であつて、奉仕が終ると、大抵はもとの國へ歸る。その者は、宮廷の信仰を持つて歸つて、自分の國の信仰として、其を傳へるのである。

大凡、さうした形に於いて、大舍人部の爲事に似た事をしてゐる、と言ふ事は決るが、其采女の中には、大舍人部のやうな部曲をつくつて流離した者も居るのでないか。その事情が訣らない。そこに問題はある訣だ。後世、訣らぬ信仰、宗教上の事は、かう言ふ采女の事と關聯があるのかも知れない。

## 私 部

其次におこつて來たものは私部である。歴代の天子の尊敬して居られた、身分の高い女の人、或は身分は低いが、愛情を持つて居られた女性などに、關聯した部曲である。此については、御子代部・御名代部も關聯して來るが、



きさきと言はれる方々と、さう言ふ部曲との關係を述べておく。

天子の場合に、其生存の記念を傳へる部曲が出来る形を、模倣したと思はれるものが、私部である。此も、きさの大舍人部の場合の様に、單に此名で傳はつたものが多く、其は、どの皇后の記念の部曲であるか訣らない。或期間までは、それだけで、其私部がどの方の部曲であると訣つてゐたに違ひない。さうでなければ、部曲自身の存在が無意味だつたのである。

それは、先の大舍人部にしても、漠然とそれだけで言つてゐるのも同じで、やはりそれだけで、古代にはどの後の私部と言ふ事の區別が、はつきりついに違ひないのである。

私部をきさいちべと言ふのは、きさきつべの音韻變化で、此が更にきさいべ、近世になるときさいとなつてゐる。武藏國の地名、騎西キサイはそれであるが、又一方、きさべ・きさいちなどとなつた地もある。

これで問題になるのは、「私」をきさきと訓んでゐることである。「私」を後に關係してゐる事に就いては、其理由の想像に二つの方法が考へられる。一つは其起源を中國に求める説で、もう一つは日本的に考へる説である。

後漢書其他の書物に、「私」を、後に關する役所に用ゐた例がある。即ち「私官」「私府」と言つた使用例で、此は、日本に於ける中宮職と言ふ様な、皇后に關する事務を取扱ふ役所の名である。

中國に於ける使用例は、天子を公と見て、其に對して、皇后を、皇后の側から見、卑下した言ひ方で私と言つたと見る事が出来る。併、此によつて、日本に於いて、後に私を關係させて考へたとするのは、餘りに珍しく此場合だけ、強ひて稀な用字例を採つてゐる訣で、どうも安定しない。

中國の場合に、さう説明する様に、日本の場合に於いては、同じ様な方法で、もつと説明がし易い。宮廷に於いて天子に直屬する大事な部曲としての大舍人部に對して、それを模倣して、皇后に屬する部曲を作り、それを、天子に對して遠慮し、その目こぼしを願つてしてゐる、と言ふ意味あひに於いて、私を使つたと考へられる。二次的におこ

つたものが、后に關する部曲であつたと言ふ所から、きさいつべに私部と言ふ字をあてたのだ、と言ふ様に解釋して大體筋は通ると思ふ。

日本の古代に澤山ある私部は、后と言ふ様な位置の人ばかりでなく、それと同じ様な待遇を受けた人、或は特別に深い愛情を持つてゐる方である爲に、特に新しい方法で待遇してやりたいと言ふお心から、部曲をたてる事もある。すると、皆、其等は、妃嬪に關する部曲と言ふ形で、きさいちべと同じ様な部曲が、出來て行く訣である。

此部曲が、男であるか女であるかは、多分男であらうが、はつきりとは訣らない。たゞ訣ることは、大舍人部にしても私部にしても、それ／＼の部曲のたて主の死後に創設せられたものだ、と言ふことで、従つて其たて主は、其村を見もせず、聞きもせず、亡くなつてゐる。勿論其等の民は、初めは、免租の地を耕して、部曲の名によつて、のどかな生活を營み、又國中を欲するまゝに移住して、さうなると、私有の土地・人民で、明らかに不輸租の田地を所有者が持つことになる。

所有と言ふ點から考へると、天子は日本國中の土地に對して、謂はゞ公の持ち主であつた。併、公の持ち主であると言ふことは、實は持ち主でないのと同じことで、天子は、我々が考へるよりもつと、何も持たない方である。

平安朝に於ける天子の位置は實に寂しい。大貴族が勢ひを張つてゐて、片隅の高きに保育せられてゐられた形になつてゐる。さう言ふ事情の、理由は訣る。つまり、天子が神を祀り世を治められたと同じ様に、大貴族が天子を祀つて治めてゐた訣で、天子は大貴族の力の元ではあつたが、御自身は、何も持つて居られなかつたのである。

勢力ばかりでなく、何の所有もない程すが／＼しい生活だが、所有の希望が生ずるのは、當り前のことであつた。かうして、せめて、亡き後に、私有の民が出來る様になり、更に、生きて居られる中に、私有の民を持たれる様にもなつたのである。

天子は神の代理者と考へられて、土地人民を所有する事は其位置が許さない訣だが、後世になると、神に對しては

私有である所の、土地人民を、おのづから持たれる様になつて來るのである。

人民は、もとく、宮廷の宗教的な生活に必要な物資を生産するものだ、と言ふのが、民に對する昔の考へ方であり、其物資のもとを生産するのが土地で、昔の人の考へてゐた二つの財産は、要するに同じ考へ方から生じた。

かう言ふ風にして、天子には、現世において、直屬の財産を持たられる事になつた。此事は、餘りはつきりとはしてゐないが、後になると、はつきりした形で現れて來る。それが、後院ゴケンである。

平安朝に於いては、上皇におなりになると、はつきりと財産をお持ちになつたが、其準備として、天子に用意せられたものが、後院であつた。天子の名の、何々院と言ふのは此後院の名であつて、特に豊かな後院にお這入りになつた上皇は、幸福であつた。歴史家は、天子が早く位を讓つて上皇になられたのを、政策上からばかり説明するが、上皇の生活を好んでせられたのは、生きて居て、所有のある生活がしたいと言ふ處に、其動機がおありになつたのである。信仰的な尊い位置は、全く何もない、わびしい、辛い、たまらない生活であつたのであらう。

### 御名代部・御子代部

右に述べた様に、信仰の上の生活は、嚴重な形式を保つて行かなくてはならなかつたから、天子に所有がないと言ふのが、本道の形であつた。従つて私有の財産を持たれると言ふ事も、所有その事を目的として考へ出られたものではない。其生存を記念する爲に作られた部曲が、さうした目的を派出して來た訣である。此が御名代部のおこりである。御名代部の起源は相當に古く、奈良朝では其が記録せられたので、傳誦は更に前からであつたのであらうが、記紀で見ても、既に、御名代・御子代の範圍は、相混亂してゐる。

御子代は、子のない女の方がなくなると、其方の記念が何もなくなつてしまふから、さう言ふ女人の爲にたてたと言はれてゐる。併、記紀に於ける例では、男の方の場合にも、御子代部が設定せられてゐる。子孫がないから、

御子代部をたて、其名を傳へる、と言ふ部曲の目的は、女性ばかりでなく、男の方にもある。つまり、記紀に於いて相當の混亂が、御子代御名代の間にある訣である。

たゞ、御名代部は、もつと廣いものらしい。即、天子と言ふのと同じ様な印象を與へてゐる程の、著しい生活をしてゐた人の爲の部曲も、此を御名代部と呼んでゐる。

日本武尊の建部は、御名代部と言はれてゐる。尊の場合は、子孫がない所ではなく、仲哀天皇は其御子で、れつきとした子孫もあるのだ。これで見ても、建部の創設は、生存を記念すべき子孫がないからではなくて、外の理由によつて、此御名代のたてられた事が考へられる。尊の場合は、明るくない理由からで、崇りをする人の爲に、部曲をたて、永遠に其名を傳へて、靈を慰める方法をとつた事を示すものであらう。

御名代部には、さう言ふ形があつた譯で、複雑な動機があつた事が想像せられる。大體天子の生存中に出來たものと見てよい。そして、天子にも皇子にも、更に、混亂した傳へでは、皇后にも、鍾愛の女性にもあつた。

其に對して、御子代部は、まう少し範圍が狭く、御子にあたるものとして、設けたものと考へて來てゐる。

譬へば、仁徳天皇の、後の皇后であつた八田皇女の爲に、御子代部として、八田部をたてられた。此皇后は、有名な、御子のない皇后であつた。記紀共に、此皇女に關する歌物語を傳へてゐるのは、其が八田部のおこりを傳へる八田部自家の傳誦であつた事が、想像出來る。

御子代部で、まう一つ言ふべき事は、安閑天皇の皇后、春日皇后（或は大春日皇后）に就いてある。

此方は、大春日氏から出た方で、大國主命の沼河比賣の場合の様な、美しい戀物語が傳はつてゐる。此春日皇后に、御子がなかつた爲に、御自分の名が傳はらぬ事を歎かれたので、天皇之が爲に土地を設けて、屯倉を三個所立てられた。此が、謂はゞ私有の土地を持たれた初めで、その古い形として傳へられたのだらう。

御名代について注意すべき記述は、安閑元年紀で、此は大舍人部より、私部よりも更に古い形を示してゐるやう

だ。「朕四妾を納れて、今に至るまで嗣なし。萬歳の後、朕が名絶えむ」と言はれた時、大伴金村「我が國家の、天下に王たる者、嗣あり嗣なきを論ぜず、要須因<sup>カナラズ</sup>物爲<sup>ツテ</sup>名<sup>ニ</sup>。請ふ。皇后次妃の爲に、屯倉の地を建立して後代に留め、前迹を顯さしめよ」と奏したによつて、小墾田屯倉・每<sup>クニ</sup>國田部、櫻井屯倉・每<sup>クニ</sup>國田部、難波屯倉每<sup>コホリ</sup>郡鑿<sup>トク</sup>丁<sup>ヘヨボロ</sup>を三妃に賜ふとある。皇后の爲には、既に匝布屯倉等が設定せられてゐた。此で見れば、天皇の名は、后妃の爲の屯倉及びその民によつて、傳はるのである。尠くともさう言ふ方法が、正式に考へられてゐた。だから、皇妃独自の名代は、私部と言ふとも考へられる。

皇子が、天子になられた場合は、問題はないのだが、皇子のまゝで過ぎ去つてしまはれる事も多い。さういふ方々の爲に設けた團體がある。此は、御名代の中にある譯だ。

御子の中でも、有力な御方は、天子と見紛へられる方がある。日本武尊などは、常陸風土記では、天皇と記してゐる。つまり、或時代には、天皇と變らぬ待遇をうけてをられた方だから、部曲を持つのは不思議でないが、御子達の爲に特に計畫せられた部曲、即、御子代部が、次第に變化して來て、宮廷と段々縁が切れて行く。そして、御子の末の財産として考へられて來る。つまり、宮廷に所屬してゐる御子は、財産のない生活をしてゐて、宮廷と離れるにつれて、財産を所有して行かれる。

譬へば、舊時代では、御子は財産が乏しいため、僧侶となり、明治以後軍籍に身をおかれるやうな習はしの元ともなつたので、宮廷は、財産の點では、淡いものであつたのだ。

昔も、特に可愛い御子で、天位に上る見込みのお立ちのないことが見定められると、宮廷外に出して、臣下にしてしまはれた。其方が財産的には豊かだつた。御子代部は、早くから、次第に財産的な意味を持つて來て、私有の土地人民を興へるもの、と言ふ風になつて來たのだ。そこへ、語自身御子に關係深さうに見える所から、皇后とか、寵人の爲だとか言ふ解釋が、加つて來たのである。

## 壬生部・丹比部

大春日皇后に關して、大國主沼河比賣唱和の長歌に似た詞章の傳はつたのは、大春日皇后の事を傳へた敘事詩が、屯倉に傳へられてゐたのだ。屯倉のたて主である皇后及び天皇の事蹟が、そこに傳へられてゐた譯だ。

宮廷に於ける女性の生活は、宮廷に於ける結婚から初まる。恰度、男の御子の場合には、誕生に語り初め、産湯の時に、どの様な異變があつたか、と言ふ所から初まるのと同じである。

皇后の生活は、宮廷の主上の心を受入れて、結婚せられる所から初まるので、其物語も亦、結婚を中心としたものが傳はるのは、自然である。

つまり、宮廷に於ける男性女性の物語は、同じ型でいつてゐるに違ひないので、誕生にしても結婚にしても、多くの皇子によつて、其々違つてゐるかと言ふと、實はさうでない。其儀式はきまつてゐる訣だから、それをそのまま傳へてゐる傳誦に、さうひどい違ひはなかつた筈。たゞ、傳誦して行く中に、變化して、特殊性が出て來るのに過ぎない。

此傳誦を見て行くと、天子に關する御名代部の起源が、或部分まで想像出來る。

天子に對しては、前に述べた様に、まづ日記部・日置部・大舍人部があり、其に對して天子の生存中から御名代部が用意せられ、皇后の方には、私部が出來、其後御子代部の名になるものが出來て行く。大體かう言ふ形が考へられるが、それなら、皇子の御名代部はどうして出來たのか。

皇子の宮に於いては、直屬の臣下は、僅かに大舍人だけである。所が、幸福な事に、天子には直屬してゐる家がある。大きな氏族が、或天子をお育てし、天子に立たせ申して、一代蔭ながら擁護する所の勢力となつた。そして、崩じて後には、此を氏族の誇りとして、其天子との關係を、其氏族が傳へた。

其氏族は、其時代の宗教家が幼い神を育てた形と全く等しく、天子を育て、行つた。つまり、天子の様な尊い方の育て方は、神を育てるのと同じ方法を以てした。其氏族の人は、神官巫女の様な位置にゐる。尊い宮廷の御子は、信仰的な特殊な關係によつて、大きな氏族にひきとられて、養はれた。そして、其皇子と氏族との關係は、其天子生涯に亘つて、深かつた。

譬へば、天武天皇の大海人皇子と言ふ名は、大海人氏がお育てしたからの名である。そして、天武天皇のおかくれになつた時、誄詞を最初に述べたのは、大海人家の主人、菟蒲ウサカである。紀に、

誄スエ壬生事ニノウマツ

とある。ことは古くから傳はつてゐる詞と言ふ事で、壬生に關係した詞を、誄詞として稱へた、と言ふ事だ。

壬生は、宮廷關係の産育に與る人の事である。宮廷に關聯してゐる尊い御子を育てる人が壬生で、其人の家が壬生氏と言はれた。どの家でも、出産並びに傳育する職を持てば、壬生と通稱せられる家になる訣だ。

天子と限らず、天子になり得る資格ある尊い御子、即、ひつぎの皇子(皇太子ではない)は數人居つて、其人達は、それ／＼大貴族に育てられた。

天武天皇の爲の壬生氏は大海人家で、其崩御の時、菟蒲が壬生の事を稱へたと言ふのは、天武天皇誕生の時の敘事詩を語つたと言ふ事であらう。おそらく壬生事は、内容は千篇一律で、どの皇子でも、お生れの時の事は、同じ様に傳へられてゐたのであらう。

つまり、大舍人部が皇子直屬の臣下であつた様に、壬生氏は、天子が其一族の一人として育てられた家であつた。さう言ふ家にも、天子生存の記念となる傳承の上の事業が行はれてゐた訣であらう。反正天皇の御名「たぢひのみづはわけ」の名義を傳へてゐるのも、其一である。

天武の時代は、古代に於いて、日本の文化が既に相應進んでゐた時代で、氏族も、氏族としての誇りを、強く持つ

てゐたであらうから、御子の生れた爲に、自分の家の事情が變つてしまつてもいゝ、とは考へてゐるまいが、昔は、皇子を育てると、すつかり家の事情の變つてしまふ事もあつたらしい。さう言ふ家を壬生氏と言つた。

其壬生氏の家についてゐて、天子と特に關係のあつたと思へるものに、壬生部がある。そして、皇子の御名代部の民は、壬生部の民であつた。天武天皇の場合で言へば、天皇の御名を傳へるために、大海人氏に所屬してゐる部曲を分離して、天武天皇の爲の部曲、言ひかへれば、御名代部をたてたのである。

此のまう少し古い形には、丹治比氏がある。此は反正天皇をお育てした家で、河内國の豪族である。

丹治比氏は、反正天皇の爲の壬生で、詳しくは、丹治比の壬生と言ふ。丹治比は後の固有名詞の字數の整理で、丹比と書いてたちひとよませ、或は、熊谷次郎丹治直實（熊谷と言ふ土地に移住した、本性丹治比氏の次郎直實）で通る様に、丹治とも書く様になつた。

此天皇の名を、多遲比瑞齒別天皇と言ふ理由には、順環した三つの傳誦が傳へられてゐる。反正天皇生れ給ひ、産湯を奉つてゐた時、湯の中に、多遲花タヂヒナが散りこんだ、それで御子の名を、多遲比瑞齒別と言つたと言ふ。つまり、此説明では、多遲花、即、虎杖花イヌドリによつた名となる。

又、此皇子の齒は、如一齒タヂヒと傳へ、蝮タヂヒの鋭いのがつた齒によせての名とも言ひ、もと／＼丹治比氏が傳育したからの名と、三説が堂々巡りをしてゐる。

ともかく、此丹治比壬生部は、とりわけ諸國に移動をして、諸所に部落を作つてゐる。此天子の爲の御名代部として、諸國へ動いて行つたものと考へられる。そして、其等のものが總べて、一つの信仰を持つてゐて、其信仰を巡つて、部落のたて主である天子に關する敘事詩を散布すると言ふ形で、繰り返し繰り返し、傳へてゐた訣だ。

## 結 び



私が此話で重點を置いてゐる所は、都を離れた遠い地方へ行つて、部落を形作つてゐる者や、又移動してゐる者が、自分達の部落に關係の深い敘事詩を語つて、特別な信仰を持つて來た事、まう一つ、其部落が何か特殊な、神事としての職業を持つてゐて、其點で、宮廷と或交渉を持つてゐる。

前に言つた様に、宮廷が或民團を持つてゐると言ふ事は、宮廷の信仰的生活が、其民の生産に依據してゐるので、其意味の生産なしには、民は考へられない。今から言ふと、其生産とは、江戸時代の用語例の「職」と言ふのに近く、勞働手藝の意味の職である。

此職によつて神に仕へてゐる譯で、従つて其部落々々には、部落の神と、職業と、文學とがあつた。

年代が經つと、此三つが各分化して行つて、變つたものが日本國中に對立して行く様になつた。傳誦は特色も失ひ、正確さも亡くして了ふが、併、特殊な歴史によつて生活の氣分だけは失はれずにある。どうかすると、或信仰に纏綿した生活があり、特殊な職業は、たとひ職の形が變つても廢らないで保たれてゐる。そして、文學めいた敘事詩を語ることが、かなりの年代にわたつて、明滅しておこつて來たに違ひない。此が、舊日本一杯に擴つてあつた所の、低級な意味の文學であつた。

此は、謂はゞ、職人の持つてゐる文學で、日本の古い職人は、低級ではあるが、かう言ふ文學——多くは敘事文學——を持つてゐた。そしてそれと分つことの出来ない程の感情で神を持つてゐた。

其點から説明して行かなくては、中世になつて卒然と興つた様に見える雜多な文學が、たゞ、佛教の唱導文學や、後代神道説經の崩れたものと見られてしまふ訣である。それには、まう少し具體的な話を、そこまで持つて行かなくてはならない。

それにしては、此話は少し起源が古すぎるのであるが、日本の國には、宮廷並びに氏族に語部があり、其が敘事詩を傳誦してゐた。併、其語部は、平安朝になると亡びてしまつて、恰も根絶した形になつてしまふ。併、書物に記録

せられて残つた敘事詩と、全く根絶したものと之間に、もつと何かの繋りがなければならぬ筈で、それでなくては、中世の敘事文學がどうしておこつて來たかと言ふ事が訣らない。

宮廷の生活は、或點は早く消え失せ、或點はいつまでも残つたが、早くなくなつた語部の末は、地方で、地方の文化を育みながら、自分自身が解體した別の姿の上にかうしてゝも残つてゐた譯だ。

時代が移つて、中央の文化が萎靡して來て、地方の文化が頭をあげて來る中世の末になると、其文學も頭を表して來た。此が近世の平民文學の黎明であつた。

私の話は、近世の文學のおこりを説くには、少し古く上りすぎると思はれるかも知れぬが、實は、大舍人部・私部・御名代部・御子代部の考へを、たてゝ見なければ、本道の所は訣らない。其等の部曲の持つてゐた文學は、痕跡のみであつて、完全な形の想像も出來ないが、書かれぬ文學の保持者としての部曲と言ふものは、考へてみなければならぬのである。

この論文に似て、もつと優れたものが、昭和十七年の國學院雜誌に連載せられてゐます。今は亡き「橋谷田大」文學士が、私の講義を美しく纏めて書いたもので、出來れば之がよかつたので、橋谷田君の名で出すことを許しました。此は原料に過ぎません。右論文御參照なさるやう、お褒めいたします。